宮城県文化財調査報告書第 129 集

富　沢　遺　跡

泉　崎　前　地　区

昭和 63 年 3 月

宮　城　県　教　育　委　員　会

特殊法人自動車事故対策センター

序　　文

私たちの現在の生活は、我々の祖先のたゆまぬ努力によって築かれた文化や生活様式を基盤として成り立っているといっても過言ではありません。

先祖が残し、あるいは伝え、またはすでに失われてしまった一切の生活の痕跡が文化財であります。そのうち、地下に埋もれている文化財が埋蔵文化財であり、一般に遺跡と呼ばれています。宮城県内にはこれまで5,700余りの遺跡が確認さています。しかし、遺跡は現在の生活の場でもあるため、常に開発の危機にさられており、とくに近年は破壊の波が急激に押し寄せています。

温故知新と言うように、祖先の歴史を知ることは私たちの生活の基盤をしっかりと見つめるとともに、未来に向けての指針となるものと信じます。当教育委員会は、この貴重な文化財を保護･活用するため、開発にあたっては関係機関と協議を行い、その保存に努めてきました。

本報告は、特殊法人自動車事故対策センターによる重度後遺症害者の療護施設建設に伴う富沢遺跡の調査成果であり、弥生時代から中･近世にわたって5枚の水田跡を検出できました。東北における稲作農耕の開始の問題は、永く本県の文化財保護審議会会長として御指導、御鞭撻を頂いた伊東信雄先生の終生の研究課題であり、東北各地の調査が東北の稲作の開始は全国に遅れるものではないという先生の学説の正しさを証明してきています。先生は昭和62年4月10日に永眠されました。これまでの御指導、御尽力に感謝申し上げるとともに、御冥福をお祈り申し上げます。

本書が研究者、関係者ばかりでなく一般の県民にも広く活用され、文化財への理解が一層深められれば望外の喜びであります。

最後に、本遺跡の協議や調整に理解を示され、調査にも多大な御協力を寄せられました関係機関に厚く御礼申し上げます。

昭和 63 年 3 月

宮城県教育委員会教育長　関　本　朝　吉

例　　言

1.本書は特殊法人自動車事故施策センターによる重度後遺症障害者の療護施設建設に伴う富沢遺跡の調査成果をまとめたものである。

2.調査の主体は宮城県教育委員会・特殊法人自動車事故対策センターであり、担当者は宮城県教育庁文化財保護課である。

3.発掘調査および整理においては、仙台市教育委員会から多大の御協力・御指導をいただいた。

4.本書における土色についての記述には「新版標準土帳」(小山・竹原：1973)を参照した。

5.本書の第1図は国土地理院発行の1/50,000地形図「仙台」を複製して使用した。

6.発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については、宮城県教育会が保管している。

7.本書の作成は文化財保護課を担当し、整理・執筆は課員の検討を経て、真山　悟・菊地逸夫・鈴木真一郎が行った。

目　　次

序文
Ⅰ　調査に至る経過 5
Ⅱ　遺跡の位置と環境 6
Ⅲ　調査の方法と経過 6
Ⅳ　基本層位 10
Ⅴ　発見された遺構と遺物 14
1.　遺構 14
12 層検出遺構 14
10 層検出遺構 14
7 層検出遺構 16
6 層検出遺構 16
5 層検出遺構 18
3 層検出遺構 20
2 層検出遺構 20
2.　出土遺物 24
Ⅵ　考　　察 27
12 層検出遺構 27
10 層検出遺構 28
6 層検出遺構 28
5 層検出遺構 29
3 層検出遺構 30
2 層検出遺構 31
Ⅶ　まとめ 32
（引用・参考文献）

調 査 要 項

遺　跡　記　号：「IY」（宮城県遺跡地名表登載番号：01369）
（仙台市文化財分布地図登載記号：C－301）
遺 跡 所 在 地：宮城県仙台市長町南四丁目20番6号
調　査　期　間：昭和62年7月1日～10月12日
調 査 主 体 者：宮城県教育委員会・特殊法人自動車事故対策センター
調 査 担 当 者：宮城県教育庁文化財保護課
調査員：佐藤秋輝・加藤道男・真山　悟・菊地逸夫・古川一明・鈴木真一郎
調査協力機関：仙台市教育委員会
調 査 協 力 員：仙台市委員会文化財課　工藤哲司
調査対象面積：1,500㎡
発　掘　面　積：1,000㎡

Ⅰ　調査に至る経過

特殊法人自動車事故対策センターは交通事故による重度後遺害者の適切な療護と病傷者を抱えた家族の負担の軽減を図ることを目的として、昭和59年2月に開設した千葉療護センターに引きつづき、全国二番目の交通事故対策センター付属重度後遺障害者療護施設の建設を計画した。宮城県はこの療護施設の設置を県の重点施策の一つに位置付け、積極的にその誘致に乗り出し、自動車事故対策センターにその旨を伝えた。建設用地関係については宮城県土地開発公社が、窓口業務については宮城県保健環境部公衆衛生課が担当することになった。また、施設の運営については委託業務とする方針がたてられ、それには仙台市長町に所在する財団法人広南会・広南病院があたることになった。そのため、同病院の隣接地・仙台市長町南四丁目20番地が建設用地として選定された。

ところが、建設予定地は弥生時代から近世までの各時期の水田遺構である富沢遺跡に含まれていた。また、昭和58年に仙台市教育委員会が実施した広南病院の建設に伴う発掘調査では弥生時代から近世まで7枚の水田遺構が重複して検出され、最下層には縄文時代の遺構も存在することが確認されていた。したがって、本建設予定地にも同様の遺構が存在するものと推定された。

そこで、昭和62年3月25日には自動車事故対策センター・広南病院・宮城県土地開発公社・宮城県保健環境部公衆衛生課と宮城県教育庁文化財保護課・仙台市教育委員会文化財課との間で建設計画と文化財の扱いについて第1回目の調整協議がもたれた。協議では、この事業が県の重点施策であることなど諸般の事情から、建設地の変更は不可能であり、事前調査を前提とした協議に入らざるを得なかった。そのため、調査期間と建設工事着手時期の調整、調査体制、施設面積の検討、調査費の確保が問題となった。その後、協議を重ね、昭和62年5月22日には最終の協議がもたれた。その結果、野外調査期間は62年7月から11月、63年7月までの延べ9ケ月が見込まれること、宮城県文化財保護課が調査を担当すること、看護婦宿舎の建設を取り止めて療護施設だけを約1,800㎡に建設すること、その範囲を調査対象地にすること、調査費は年度毎に要求し、昭和62年度の経費は2,700万円とすることなどの諸点が確認された。

野外調査は、6月中に土地開発公社が表土を除去したのに引き続き、7月1日から遺構検出を開始した。10月12日までには弥生時代から中・近世にかけて5面の水田跡を検出し、一切の野外調査を終了した。その間、仙台市文化財課主事工藤哲司氏には調査の要所要所で広南病院建設地との層位の対応関係などで、種々ご指導を頂いた。厚く感謝を申し上げる次第である。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

富沢遺跡は仙台市南西部の富沢地区に所在し、名取川、広瀬川両河川の流域に広がる沖積低地に立地している。約80万㎡の広大な面積を有する遺跡で、これまで仙台市教育委員会を中心として幾度か調査が実施されており、主に弥生時代・古墳時代・平安時代・中近世の水田跡が数多く発見されている。今回の調査地点は遺跡の南端の仙台市長町四丁目20番地にあり、昭和58年に実施された泉崎前地区の調査地点(工藤哲司他：1984)の南隣りにあたる面積約1,000㎡ほどの所である。

本遺跡における地理的環境についてはすでに上記の本地区調査報告書に詳しい。それによれば本地区周辺は主に名取川やその支流である笊川によって形成された後背湿地になっており、その範囲は広く南西の富沢中学校付近から、北東の鍋田地区方面に及んでいる。標高は本地区周辺で約10mである。このような後背湿地に対し、自然堤防などの微高地状の高まりは、本遺跡の南側に隣接する下ノ内地区から大野田地区にかけて発達したものがみられるほか、遺跡中央に位置する泉崎前地区の一部に東西にのびる小規模なものが認められている。標高はそれぞれ12m、11mである。いずれも本調査区から200～300mの比較的近い位置にある。これを遺跡の内容からみると、前者の微高地からは縄文時代や古墳～平安時代の集落跡が、後者からも古墳時代の集落跡が発見されており(田中則和他：1981・吉岡恭平：1983)、後背湿地にあって水田遺構が主体となる本遺跡とは明瞭な対比をなしている。

Ⅲ　調査の方法と経過

今回の調査は建物の建設予定部分約1,000㎡を対象とした。発掘に際しては、厚さ2mほどの最近の積み土を除くと各堆積層が全般に薄く、また地盤が軟弱なこともあって、遺構検出までの粗掘りについては、重機を用いず、人力で行った。検出した遺構については、精査・写真撮影ののち国家座標を基準とした平板測量により縮尺1/60の平面図を作成し、土層の堆積状況については縮尺1/20による断面図を作成している。なお、杭列等の細かな遺構については必要に応じて縮1/20の平面図を作成した。

調査は昭和62年7月1日から開始され、終了したのは同年10月12日である。その概要は以下のとおりである。ただし、積み土については事前の6月中旬に土木業者によってすべて取り除かれている。

7月1～4日　：調査開始、排水用の側溝掘り、土層の断面観察

7月6日～　：遺構検出の粗掘りを開始、1号水路跡検出、同水路跡精査

第１図　位置と周辺の遺跡

No	遺跡名	種別	立地	時代	No	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	水田跡	後背湿地	弥生～近世	39	岩口上遺跡	包含地	台地	古墳・奈良・平安
2	泉崎浦遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安	40	熊野経塚	経塚	山林宅地	中世
3	山口遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安	41	八ツ口遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
4	教塚古墳	古墳	沖積平野	古墳(後期)	42	高館城跡	城館	丘陵	中世
5	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	43	大館山館跡	城館	丘陵	中世
6	貨東遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安	44	笑輪A区古墳群	前方後円墳	段丘	古墳
7	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	45	笑輪B区古墳群	円墳	段丘	古墳
8	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	46	北野横穴	横穴	段丘	奈良・平安
9	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	47	南台窯跡	窯跡	段丘	奈良・平安
10	大野田古墳群	古墳	自然堤防	古墳	48	今熊野遺跡	貝塚・集落	段丘	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
11	郡山遺跡	郡衙	自然堤防	古墳・奈良	49	東内館遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
12	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳	50	川上遺跡	包含地	沖積平野	縄文・弥生・奈良・平安
13	若林城跡	城館	自然堤防	中世～近世	51	鹿野東遺跡	包含地	沖積平野	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
14	塚塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	52	真坂遺跡	包含地	沖積平野	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
15	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)	53	高畑遺跡	包含地	沖積平野	弥生・古墳・奈良・平安
16	陸奥国分寺跡	寺院跡	沖積平野	奈良	54	北宮神妙遺跡	包含地	沖積平野	奈良・平安
17	向山横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良	55	薩田遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
18	大年寺横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良	56	関東遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
19	宗禅寺横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良	57	松本遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世
20	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳(中期)	58	雷遺跡	包含地	自然堤防	平安
21	一塚古墳	円墳	段丘	古墳	59	雷東遺跡	包含地	自然堤防	平安
22	二塚古墳	前方後円墳	段丘	古墳	60	谷地田遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
23	三神峰遺跡	集落跡	段丘	縄文	61	安久遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・平安・中世
24	三神峰古墳群	古墳群	段丘	古墳(後期)	62	伊豆野権現古墳	円墳	自然堤防	古墳
25	富沢金山窯跡	窯跡	段丘	古墳・奈良・平安	63	安久東遺跡	古墳・集落	自然堤防	弥生・奈良・平安～近世
26	囂町古墳	前方後円墳	段丘	古墳	64	安久東古墳	古墳	自然堤防	古墳(古墳)
27	金洗沢古墳	円墳	段丘	古墳	65	栗遺跡	集落跡	自然堤防	古墳
28	金岡八幡古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)	66	前田館跡	城館	自然堤防	中世
29	富沢館跡	城跡	自然堤防	室町	67	壇腰遺跡	包含地	沖積平野	奈良・平安
30	上野遺跡	包含地	段丘	縄文・奈良・平安	68	天神塚古墳	方墳	自然堤防	古墳(中期)
31	山田上ノ台遺跡	包含地	段丘	旧石器・縄文・平安・近世	69	中田北遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
32	北前遺跡	包含地	段丘	旧石器・縄文・古墳・平安	70	中田南遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
33	船渡前遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・平安	71	後河原遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
34	横田原西遺跡	包含地	自然堤防	縄文・平安	72	上余田遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
35	黒崎城	城館	丘陵	中世	73	田高遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
36	小館	城館	丘陵	中世	74	安久諏訪古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)
37	熊野堂大館	城館	丘陵	中世	75	金剛寺貝塚	貝塚	段丘	縄文・弥生・奈良・平安
38	熊野堂横穴	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良					

第１表　遺跡地名表

7月17日～　：12層で水田の畦畔と思われる遺構を検出、水路跡と並行して精査

7月30日　：12層の水田跡、水路跡の精査終了、写真撮影

7月30日～8月3日　：1遺構の平面図作成、2層掘り下げ

8月4日　：3層で2～5溝検出、写真撮影、平面図作成

8月5日～7日　：3～4層掘り上げ

8月17日・18日　：5層上面精査、水田の畦畔とみられる遺構を検出

8月19～22日　：5層の水田跡検出、精査、写真撮影、平面図作成

8月22日～31日　：5層掘り下げ、6層上面で水田の畦畔とみられる遺構を検出

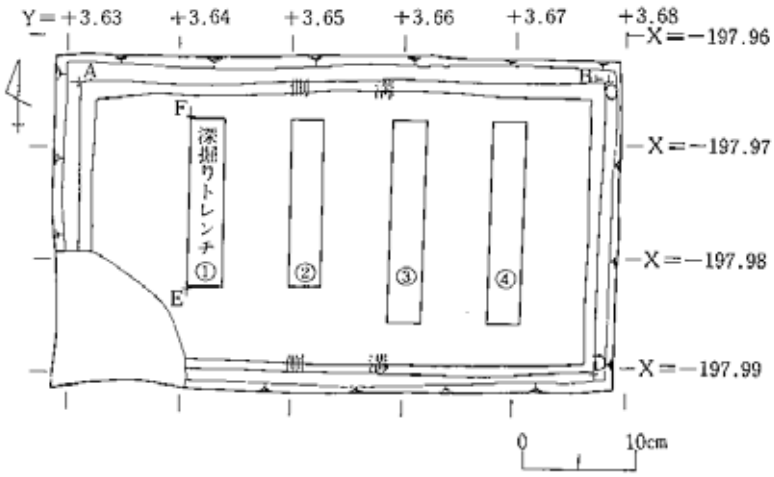
9月1日～4日　：6層の精査、水田跡を検出

9月8日　：6層水田跡の写真撮影、平面図作成

9月9日　：6層掘り下げ

9月11日～18日　：7～9層掘り下げ

第2図　富沢遺跡泉崎前地区周辺図（原図は仙台市教育委員会提供）



第３図　調査区設定図

9月22日　　：10層上面で畦状遺構を検出、精査、写真撮影、平面図作成
9月24～30日　：10･11層掘り下げ
10月1日～3日　：12層で畦状遺構･旧河川を検出、精査
10月5日　　：遺構の写真撮影、平面図作成
10月5日～　　：土層断面図作成開始、併行して12層以下の探掘りを行う
10月12日　　：調査終了

Ⅳ　基　本　層　位

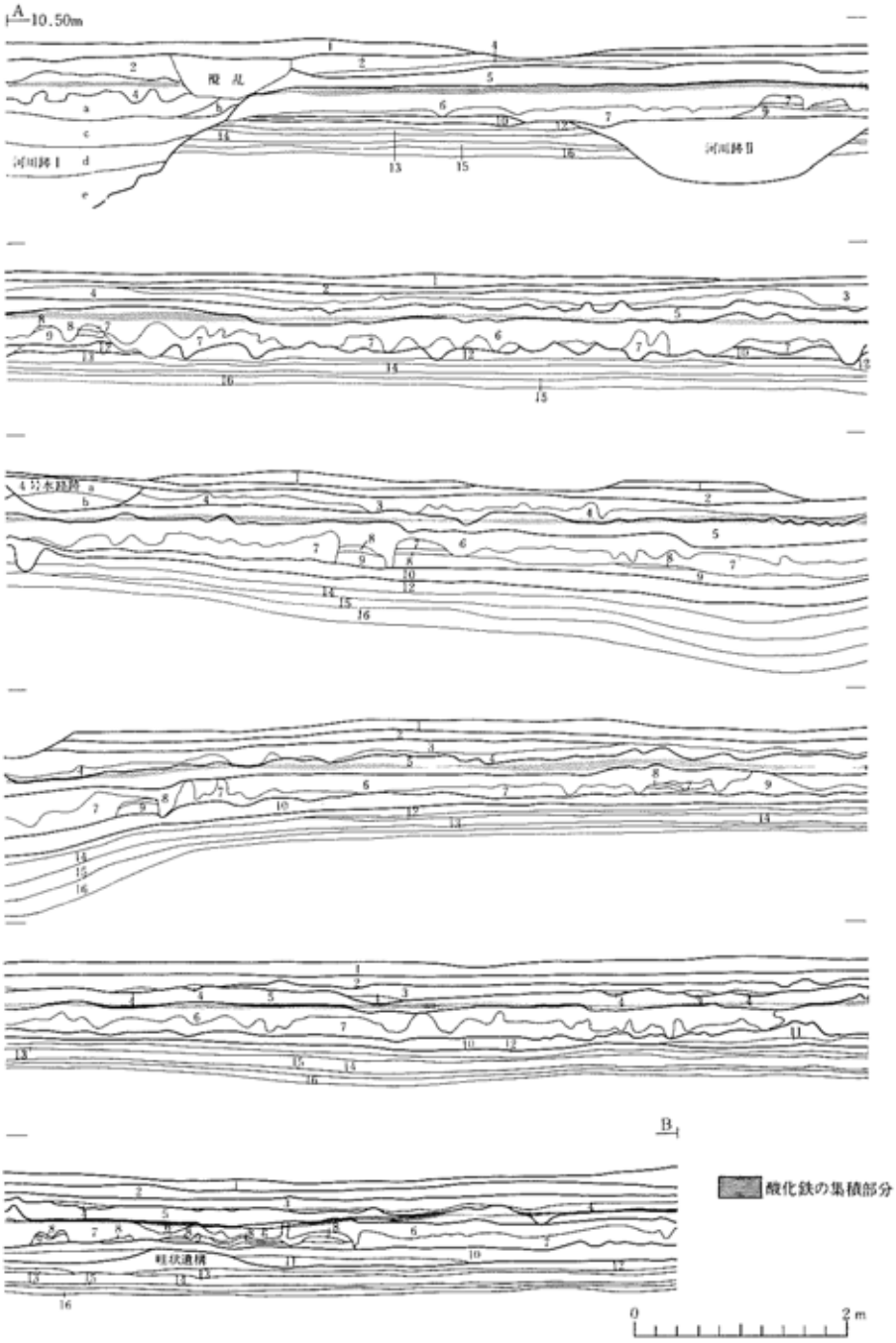
本調査区における堆積層は、表層の砂質層を除くと、大部分が湿地特有の粘性の強いシルト質の土からなっている。表土から最終遺構検出面までの厚さは約1.0㎜で、基本的には12枚の層に分けることができる。各層の多くは調査区のほぼ全面に分布するもので、概ね平坦に堆積し、高度は僅かずつ北東に向かって傾斜している。なお、調査区の中央に南北方向に走る凹んだ部分がある。これは表土から1.5㎜ほど下にある第18層の旧河川の流路に合致するもので、本来水平に近いはずの各層の水田や水路がたわみ、それが下層になるほど激しくなることや、土壌自体が植物質を含む間隙の多い土性であることから、凹みの原因は後世の連続的な沈下によるものと考えられれた。以下各層の概要について記すと次のようになる。

第1層　黄褐色の砂質土で、厚さは約15㎝になる。表土で近年までの水田耕作土である。

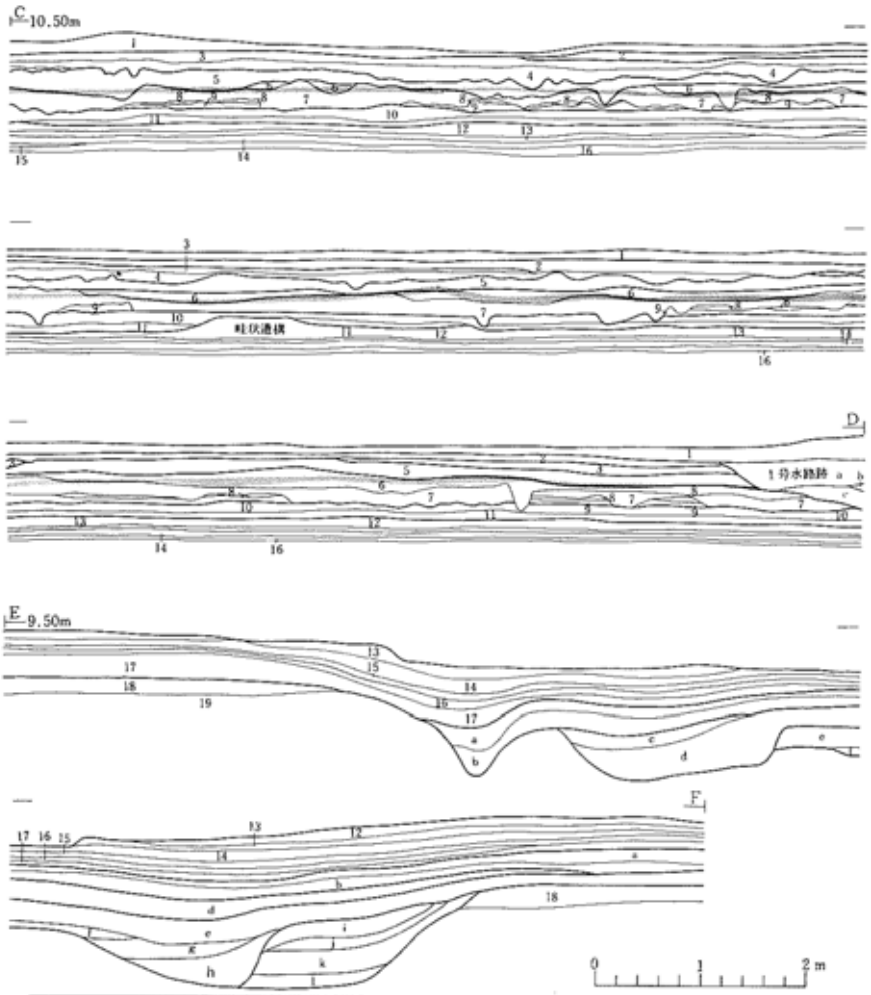
第2層　土色、土性ともに第1層に近似するが、やや暗い色調を呈する。厚さは約15㎝で、上半部は酸化鉄の集積が著しい。本層から中～近世の水田跡や水路跡が検出されている。

第3層　褐色の砂質土で、厚さは10～20㎝になる。本層では水路跡が検出されている。

第4層　黒色の粘質土で、厚さは10～15㎝になる。調査区南側ではあまり分布しない層で、粗



第4図　基本層位 (1)



№	土色	土性	有機物含量	備考
1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	なし	現水田耕作土
2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	なし	酸化鉄の集積あり 水田跡、水路跡検出
3	暗オリーブ褐色 2.5Y3/3	砂質シルト	少し含む	水路跡検出
4	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト	含む	
5	暗灰黄色 2.5Y4/2	シルト	含む	水田跡検出 灰白色火山灰をブロック状に含む
6	黒褐色 2.5Y3/2	シルト	含む	水田跡検出 上面に灰白色火山灰薄く堆積
7	黒褐色 2.5Y3/1	シルト	含む	人為的撹乱あり、河川跡検出
8	暗灰黄色 2.5Y4/2	シルト	含む	粘性あり
9	黒色 2.5Y2/1	シルト	多量に含む	粘性あり
10	オリーブ黒色 5Y3/1	シルト	多量に含む	畦状遺構検出
11	オリーブ黒色 5Y2/2	シルト	多量に含む	
12	黒色 10YR2/1	シルト	多量に含む	畦状遺構検出
13	黒色 10YR1.7/1	シルト	多量に含む	
14	灰色5Y4/1 黒色5Y2/1	シルト	多量に含む	泥層になっている
15	黒褐色 10YR3/2	シルト	多量に含む	
16	黒色 10YR1.7/1	シルト	多量に含む	
17	黒色 2.5Y2/1	シルト	多量に含む	
18	オリーブ黒色 5Y3/1	シルト	含む	
19	浅黄色 2.5Y7/4	砂	なし	
20	褐灰色砂レキ層		なし	

遺構名	№	土色	土性	備考
1号水路跡	a	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂、粘土混層	褐灰色のレキを含む
	b	灰褐色 2.5Y4/1	砂、粘土混層	
	c	黒褐色 2.5Y3/1	シルト	未分解植物遺体多く含む
4号水路跡	a	黒褐色10YR3/1 褐灰色10YR4/1	シルト細砂混層	
	b	にぶい黄褐色 10YR7/4	砂	小円レキ多く含む
河川I	a	黒褐色 10YR2/2	シルト	未分解植物遺体多量に含む
	b	暗灰黄色 2.5Y4/2	シルト	未分解植物遺体少し含む
	c	暗灰黄色 2.5Y4/2	シルト	未分解植物遺体多量に含む
	d	黄灰色 2.5Y4/1	シルト	
	e	黄灰色 2.5Y4/1	シルト	
河川E	a	オリーブ黒色 5Y2/2	シルト	未分解植物遺体多量に含む
河川B	a	黒褐色 2.5Y3/1	シルト	未分解植物遺体多量に含む
	b	黒褐色2.5Y2/1 浅黄色2.5Y7/4	砂、シルト混層	未分解植物遺体多量に含む
	c	黒色 2.5Y2/1	シルト	未分解植物遺体多量に含む
	d	浅黄色 2.5Y7/4	シルト	未分解植物遺体多量に含む
	e	黒色 5Y2/1	砂質シルト	
	f	灰オリーブ色 5Y5/3	砂質シルト	
	g	黒色 5Y2/1	砂質シルト	
	h	浅黄色 2.5Y7/4	砂	
	i	オリーブ黒色 5Y3/1	砂質シルト	
	j	黒色5 5Y2/1	シルト	
	k	灰オリーブ色 5Y2/2	砂質シルト	
	l	5Y4/2	砂質シルト	

第５図　基本層位 (2)

い攪拌が認められる。

第5層　灰黄色土で、厚さは10～40cmである。比較的厚く安定した層で上面から平安時代と考えられる水田跡が検出されている。

第6層　黒褐色土で、厚さは10～30ｃｍである。部分的に未分解の植物遺体を含む層で、上面に灰白色火山灰が薄く堆積している。なお、上位の5層から本層にかけて酸化鉄の集積が認められており、その状況から第2層水田跡に対応するものと考えられた。遺構として灰白色火山灰直下から平安時代の水田跡が検出されている。

第7層　黒褐色の粘質土で、厚さは10～30cmである。全体に粗い攪拌がみられ、下層の第8･9層を巻き込んだ部分も多くみられる。

第8層　灰黄色の土壌で、厚さが5cmと薄く、第7層の攪拌が及ばないところに認められる。未分解の植物遺体を若干含んでいる。

第9層　黒色の粘質土で、厚さが5～10cmになる。なかに未分解の植物遺体を多く含む層で第8層と同様のところに分布する。

第10層　灰黒色の土壌で、厚さは10～20cmを測る。なかに未分解の植物遺体を多く含んでおり、上面から弥生時代のものと考えられる畦状遺構が検出されている。

第11層　灰黒色の土壌で、第10層に近似するが、より暗い。厚さは約10cmと一定で、なかに未分解の植物遺体を多く含む。調査区西側にはあまり認められない。

第12層　黒色の土層で、厚さが10～20cmになる。なかに未分解の植物遺体をかなり多く含む。本層上面で弥生時代のものと考えられる畦状遺構が検出されている。

第13層以下については水田等の遺構が認められなかったものである。基盤層である砂礫層までの深さは約3mで、6枚ほどの層に分かれている。このうち上位の5枚の層の大部分は黒色の粘土のある土壌で、未分解の植物遺体を多量に含んでいるのに対し、下位の層は厚い青灰色の砂層になっており、土性が明瞭に区別される。

今回調査			昭和58年度調査		
層No.	土色・土性	備考	層No.	土色・土性	備考
1	黄褐色砂質シルト	近年の水田	1	灰黄褐色	近年の水田
2	黄褐色砂質シルト	水田跡	2	褐色	床土、酸化鉄集積層
3	暗オリーブ褐色砂質シルト	水路跡	3	黒褐色シルト質粘土	水田跡
4	黒色シルト	粘性強い	4	黒褐色粘土	部分的に砂を含む
5	暗灰黄色シルト	水田跡	5A	黒褐色粘土	水田跡
6	黒褐色シルト	水田跡、上面に火山灰	5B	黒色粘土	上面に灰白色火山灰
			5C	にぶい黄褐色粘土質シルト	
			6	褐色	酸化鉄集積層
7	黒褐色シルト	河川跡、粘性あり	7A		7B～7Dが攪乱で混合
			7B	黒褐色粘土	杭列を伴う溝
8	暗灰黄色シルト		7C	にぶい黄褐色粘土	
9	黒褐色シルト	植物質を多く含む	7D	黒色粘土	
			8A	暗褐色粘土	植物質を多く含む
10	オリーブ黒色シルト	畦状遺構	8B	黒褐色粘土	水田跡、植物質多い
11	オリーブ黒色シルト	10層より暗い			
12	黒色シルト		9	黒色粘土	水田跡、植物質多い

第２表

なお、上記の層のうち1～12層までを昭和58年度の調査における基本層位とを比較、対応させたのが第2表である。

Ⅴ　発見された遺構と遺物

発見された遺構には各時代の水田跡と溝(水路跡)が、遺物には近世陶磁器・土師器・須恵器・弥生土器・石庖丁・石鏃・石鍬等がある。ここではまず下層から各遺構についてふれ、次に出土物について述べていくことにする。

1．遺　構

12 層検出遺構

12層上面から畦状遺構が検出されている。それは調査区の北東部に限られるもので、他の地区,特にやや比高の高い西半部においてはいくつかに枝分れした小河川跡がみられるのみである。

[畦状遺構]

畦状遺構は基底幅約120～150㎝、高さ約10㎝の断面が台形でかなりしっかりしたものである。東西方向にのびるものと、南北方向にのびるものとがほぼ直交していることから、概ね方形状の区面をなすと思われるが、その延長が調査区外にあるため全体形及び規模については明確でない。区面内の高度は、付近の地形が僅かずつ北東に傾斜していることもあって、区画外と比較すると5～6㎝ほど低く、区画内でも南北の畦状遺構を境とした東と西とでは、東側がいくぶん低くなっている。

畦状遺構に関連するものとして杭列がある。すなわち東西方向の畦状遺構が一部途切れたり、やや折れ曲がったりする部分にあるもので、太さ約3㎝の細い杭数本が、同畦状遺構でも直線的な西半部分の中心線に沿うように20～50㎝の間隔で打ち込まれている。この他、南北方向の畦状遺構の南端に途切れた部分があるが、杭列は伴っておらず、水口状のものと考えられた。

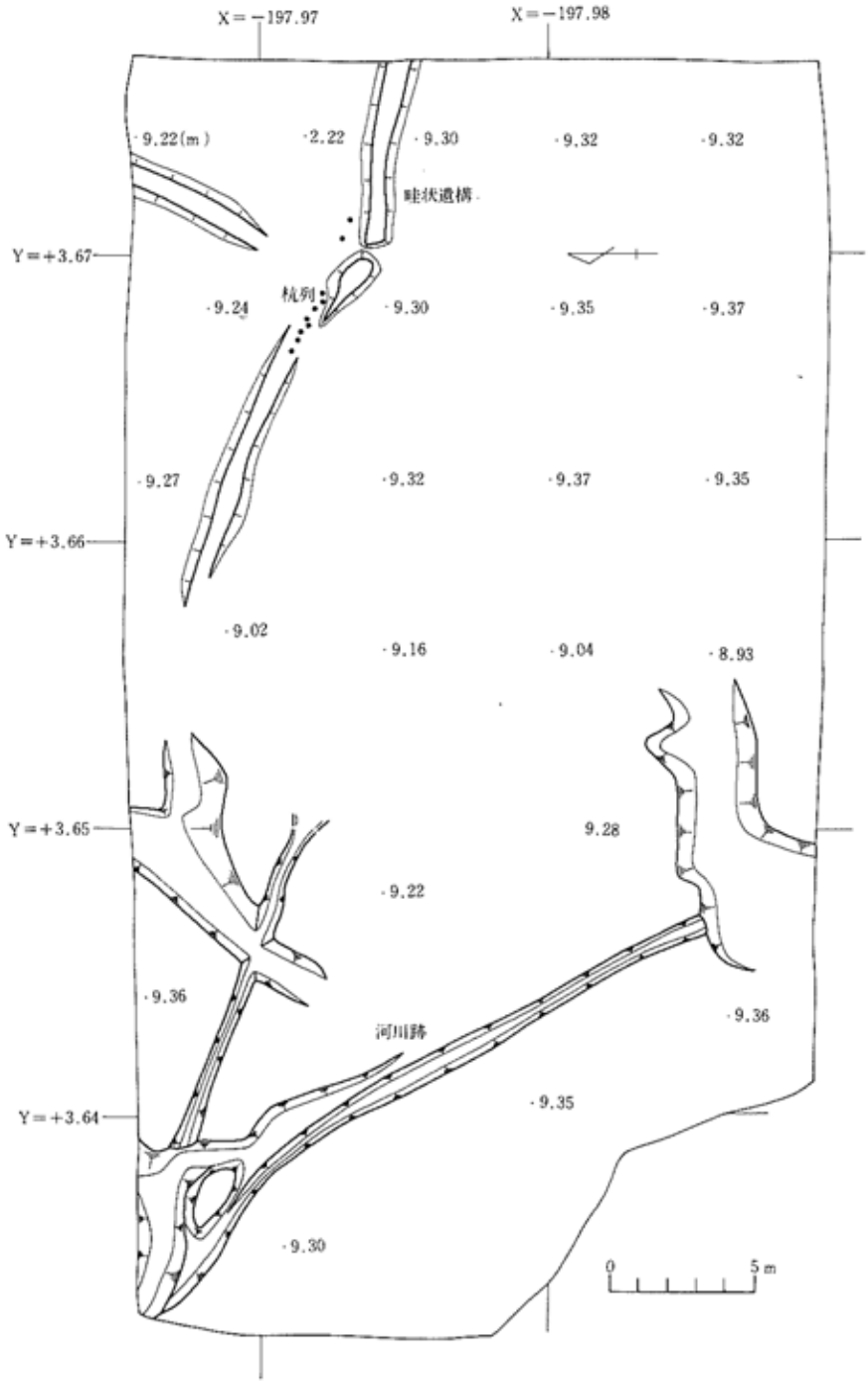
なお、畦状遺構の構成土壌および周辺の堆積土壌である第9層は前述したように粘性の強い黒色土で、なかに未分解の植物遺体をかなり多量に含んでおり、同地区周辺の環境が湿地性の強いものであったことを想定させる。本層からは弥生土器片や石庖丁が出土している。

10 層検出遺構

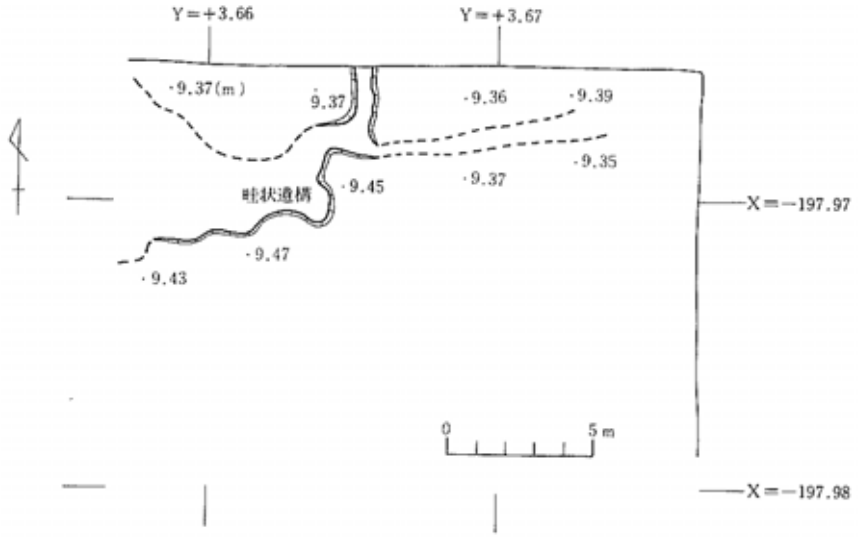
調査区の北東部において、畦状遺構が検出された。

[畦状遺構]

畦状遺構は東半部が基底幅約50～90㎝、高さ約3㎝で、「L」字状にのびた状態で確認さ



第６図　12層検出畦状遺構



第7図　10層検出畦状遺構

れ、方形状の区画を有する可能性も考えられた。しかし、その西半部は西側に向かうほど幅広くなり、かなり不規則な形態を示す。

畦状遺構の構成土壌およびその周辺の堆積土壌は灰色味を帯びた粘性の強い黒色土で、なかに未分解の植物遺体を多量に含んでおり、このことは同地区周辺の湿地性の強い環境を想定させている。

7層検出遺構

7層面は基本層位の項でも述べたとおり全体に粗い攪拌がみられ、下層の第8･9層を巻き込んだ部分が多い。河川跡が一条検出されたのみで、他の遺構は検出されなかった。

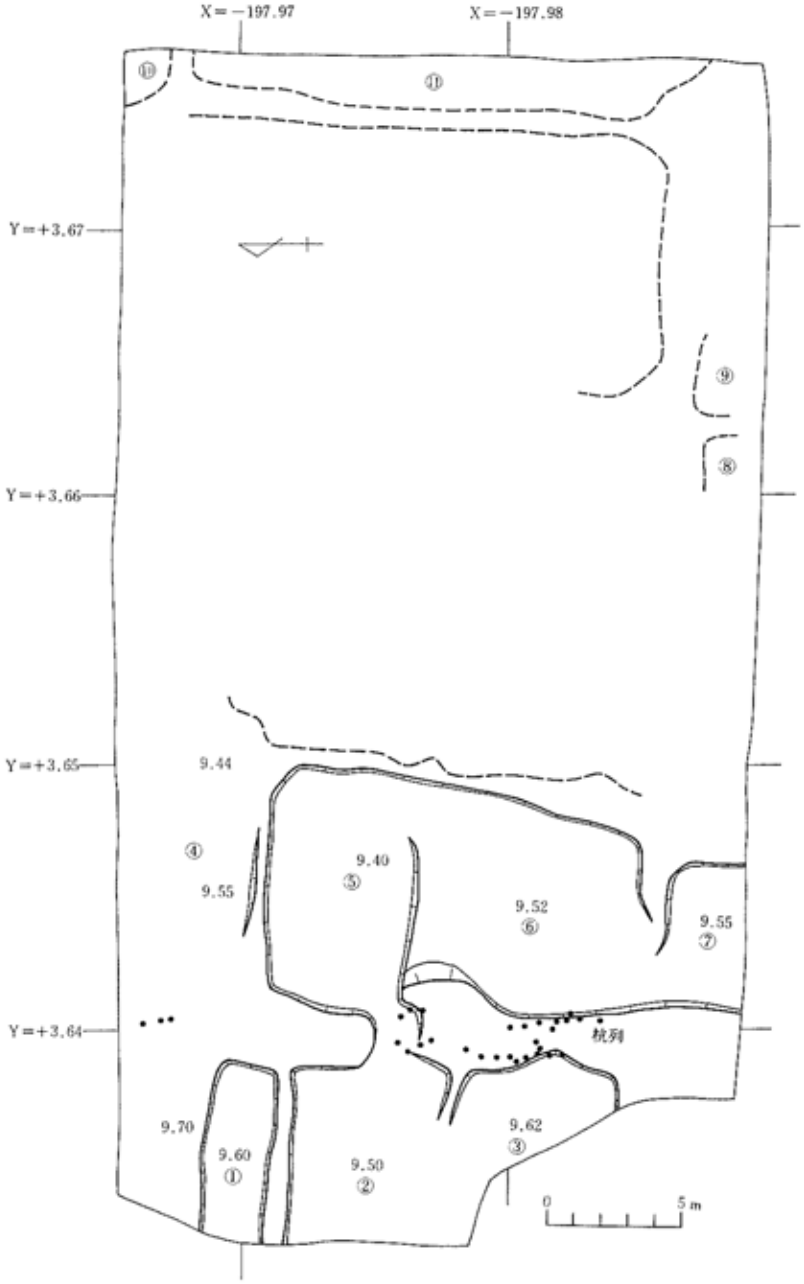
6層検出遺構

6層面の地形は大きくみれば西から東にむかって緩やかに傾斜する地形を呈しており、畦畔は調査区の周縁部から検出された。また、北西隅は他の部分と比べさらに一段高くなっており、この部分と水田の調査区西側の南北畦畔上や調査区東側の部分の耕作土の上面からは灰白色火山灰がブロック状ではあるが面約に検出された。発見された遺構には水田跡がある。

[水田跡]

6層で確認された水田の枚数は12枚ある。しかし、畦畔の検出されなかった調査区中央部についても周囲の畦の延長が対応することから、この部分にも本来的には畦畔が存在したと考えられ、実際の水田枚数はもっと増えるものと思われる。

水田の形状はほぼ方形を基調としている。規模については一筆全体がわかる水田が検出されておらず不明であるが、南北長だけをみても水田①が2.6m、水田⑤が5.4m、水田⑥が8mと


X＝－197.97
X＝－197.98
Y＝＋3.67
Y＝＋3.66
Y＝＋3.65
Y＝＋3.64
⑩
⑪
⑨
⑧
9.44
④
9.55
9.40
⑤
9.52
⑥
9.55
⑦
杭列
9.70
9.60
①
9.50
②
9.62
③
0
5 m

第8図　6層検出水田跡

さまざまな大きさのものがある。

水田を区画する畦畔は痕跡のみが認められるものを含めて南北畦畔4条と東西畦畔4条が検出された。これらの中で調査区西側で検出された南北畦畔は上幅が1.2～2.0㎜あり、他の畦畔の幅が約50㎝程度であるのと比べるとかなり幅が広く作られており、しかもの両岸に沿って直径4～10㎝の先端部のみ加工した丸太材を打ち込んだ合計32本の抗列が見られ、この畦畔は他の畦畔と性格を異にし、より大きな区画すなわち基礎となる区割りをするための基幹的な畦畔(大畦)であったと考えられる。また、畦畔の中央部は約70㎝ほど途切れ、水田②から水田⑤に水をひく水口が形成されている。

次に畦畔の方向をみると、中央の南北畦畔が座標北から東に約10度振れているのを除き、他畦畔はすべて座標方向に一致、またはほぼ一致しており畦畔の区画は真北が基準にされたと考えられる。

耕作土は植物質を含む黒褐色のシルト質土で、耕作の深い所では11層にまで達している部分があった。6層水田に伴う酸化鉄の集積は特にみられなかった。

6層中からは、土師器、須恵器等が出土している。

5 層検出遺構

5層面の地形も6層面と同様に西から東に向かって傾斜する地形を呈し、畦畔等は主に調査区周縁部から検出された。発見された遺構には水田跡、及び水路跡4条がある。

また、北西隅の部分からは河川跡が検出され、その南岸の部分は周囲よりも高くなっていることから、この部分は水田域ではなかった可能性がある。

[水田跡]

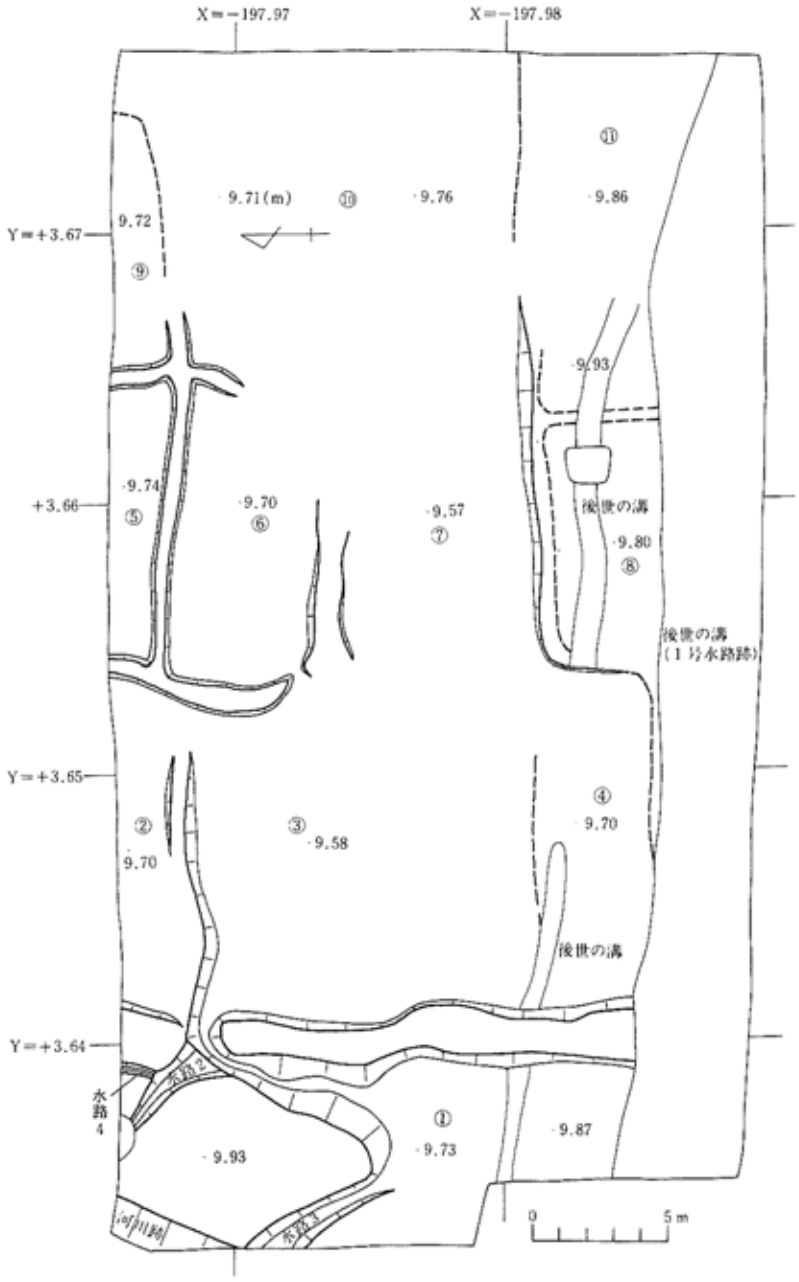
5層で確認された水田の枚数は11枚を数える。しかし、比較的残存状況の良かった北端と南端以外の水田③⑦⑩付近では畦畔部分的に検出されたのみで、これらの水田はさらに数面に分割される可能性がある。

水田の規模、形状については一筆全体がわかる水田が検出されておらず不明であるが計測できるものは東西長8～10㎜、南北長5㎜ほどの東西に長い長方形を呈している。

水口は水田③⑥から検出された。水田③の水口は南北の大畦を切って作っており、水路②から水をひくために、水田⑥の水口は南西隅にあり、水田③から水をひくために作られている。

畦畔は痕跡のみのものも含め、南北畦畔3条、東西畦畔4条が検出された。これらの中で、南北大畦は6層で検出された大畦と位置、規模ともほぼ一致し、中央の南北畦畔や南側の東西畦畔も前層で検出された畦畔とほぼ同様の位置に検出された。

次に畦畔の方向をみると、中央の南北畦畔が座標北から東に約10度振れているのを除き、すべて座標方位に一致、またはほぼ一致しており、真北を基調として区画したと考えられる。


X=−197.97
X=−197.98
Y=+3.67
+3.66
Y=+3.65
Y=+3.64
9.71(m)
9.72
9.76
9.86
9.93
9.74
9.70
9.57
9.80
9.70
9.58
9.70
9.93
9.73
9.87
後世の溝
後世の溝
(1号水路跡)
後世の溝
水路4
0
5m

第9図　5層検出水田跡

耕作土は未分解の植物をほとんど含まない暗灰黄色のシルトで厚さは5～20㎝程あり、6層上面に堆積した灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。5層水田に対応する酸化鉄の集積はみられなかった。

[水路跡]

5層では水路跡4条(①～④)が検出された。調査区北西端をかすめるように南西方向に流れる河川跡が検出され、水路として利用されたと考えられる(水路①)。この水路は大部分が調査区外に延びるため、規模については不明である。調査された部分では幅1.5m以上、深さ1.0m以上ある。

水路②③は調査区北西で検出された。これらの水路は水路①と直接連結はしないものの、直交する位置から検出されており、また規模も幅50～70㎝と水路①と比べかなり小さいことから、基幹的水路(主水路)からの水田③④への導水路と考えられる。

水路④は大畦北端の西側に沿って延びる溝で、溝②と接続する。規模は上幅約50㎝、深さ3㎝である。検出された部分がわずかであるため性格等については不明である。

3 層検出遺構

3層では、4条の水路跡が検出されたのみで、畦畔等は検出されなかった。

[水路跡]

2号水路跡は調査区南東寄りに位置し、東西にのびる水路である。「く」字状に曲折し、4号水路跡と接続する。規模は幅60㎝～1m、深さ約15㎝である。底面の勾配は非常に緩く、後述する3条の水路跡と同様に水流の向きは判断しがたい。

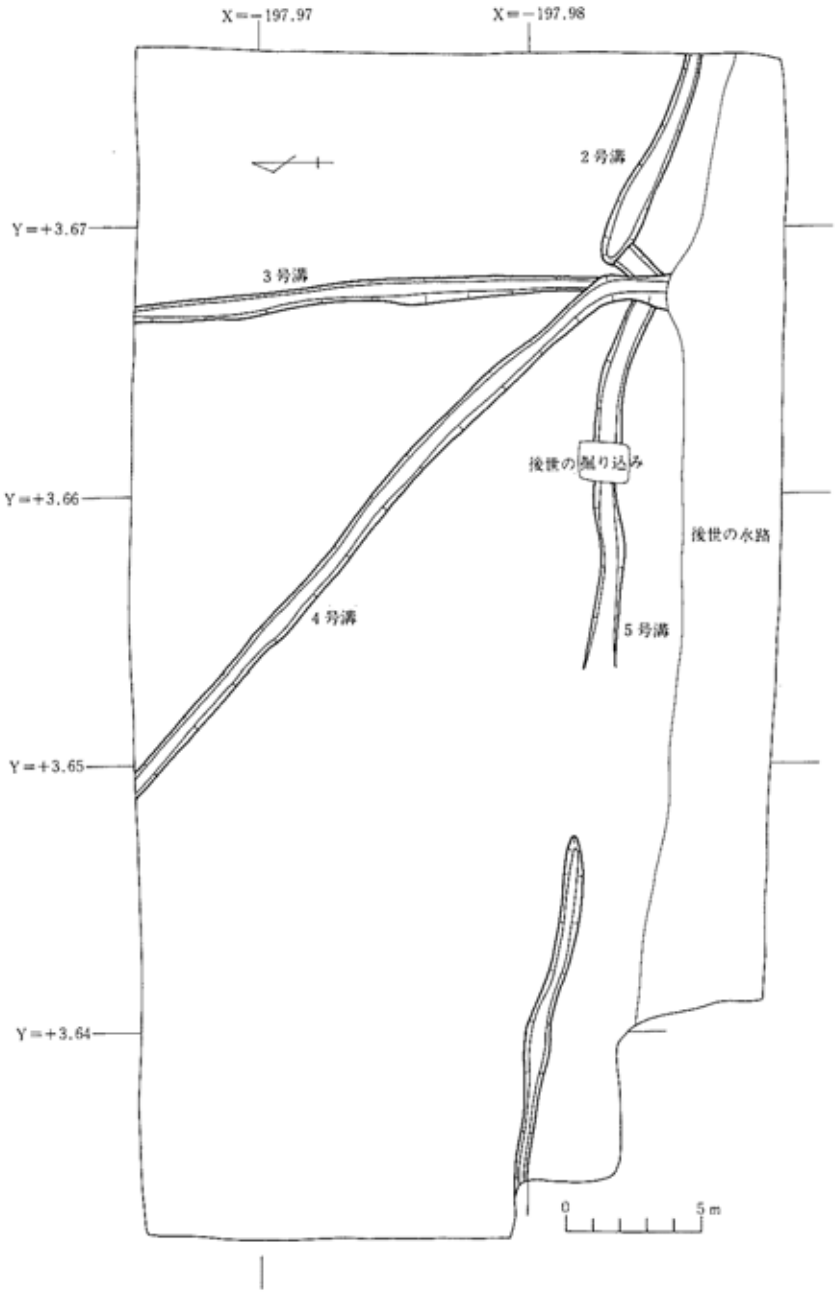
3号水路跡は調査区東寄りの位置に南北に直線的にのびる水路跡で、4号水路に接続する。規模は幅60～80㎝、深さは約10㎝である。

4号水路跡は調査区北西から南東部にかけて直線的に延びる水路跡で、南東端で「く」字状に曲折し、その付近で他の3条の水路と接続する。規模は幅60㎝～90㎝、深さ13～20㎝で、断面は逆台形を呈する。堆積土は2層認められ、上層がシルト質土、下層は砂で、他の3条も同様であった。なお、水路跡の接続部分の南側は2層で検出された1号水路跡により削り取られ不明である。

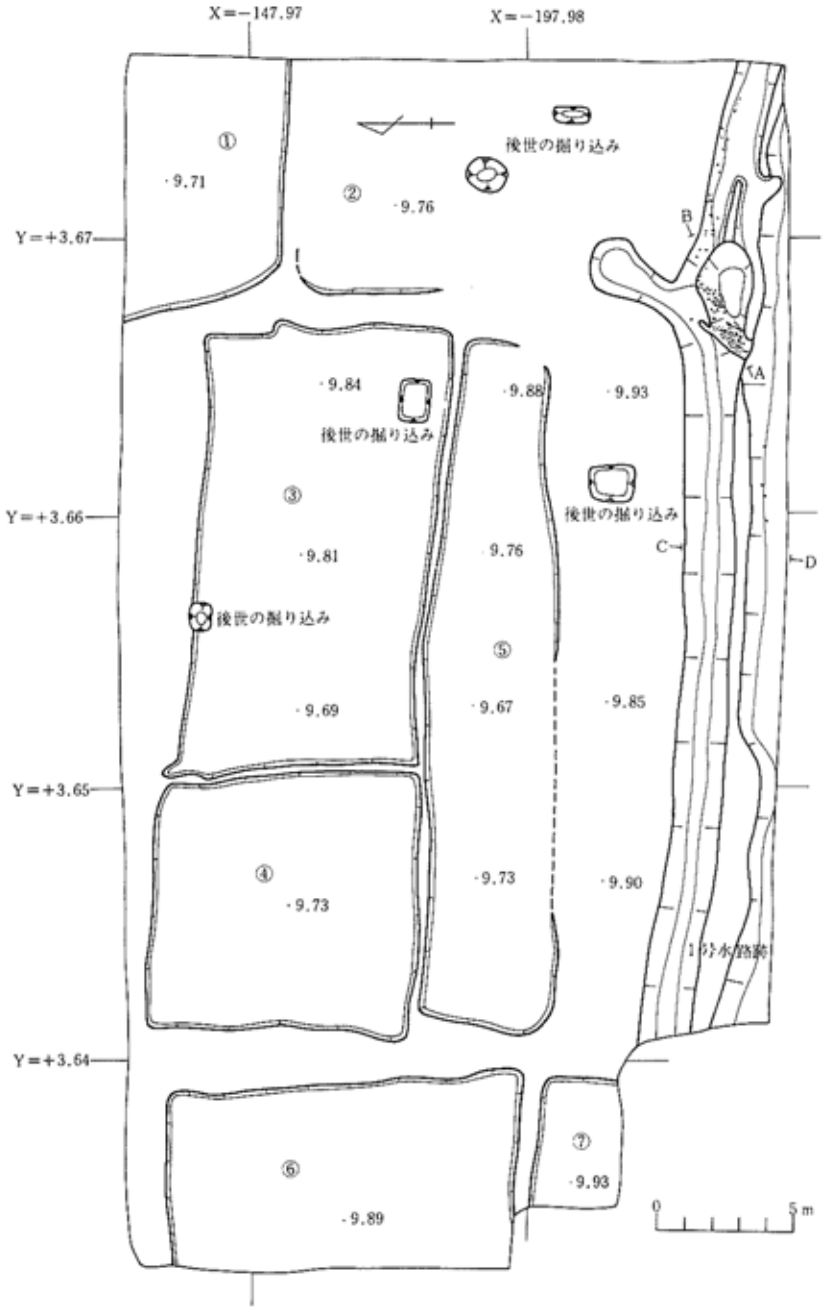
5号水路跡は調査区南寄りに東西に延びる水路跡で、2号水路と同じ位置で4号水路と接続する。規模は幅60㎝～1m、深さ約15㎝である。

2 層検出遺構

2層上部には著しい酸化鉄の集積がみられ、それを取り除いた段階で遺構が検出された。発見された遺構には、水田跡と水路跡がある。



第10図　3層検出水路跡



第11図　２層検出水田跡

[水田跡]

2層で確認された水田は7枚で、このなかで一筆がわかるものは3枚ある。これらの水田の形状は正方形、東西に長い長方形、細長い長方形と三様で、面積はそれぞれ86㎡・136㎡・86㎡である。一筆の不明な4枚についても、形状は方形を基調したものと考えられる。

畦畔は南北畦畔が3条、東西畦畔が5条あり、いずれも直線的に延びる。しかし、その間隔は一定ではない。また、南北畦畔、東西畦畔それぞれ2条ずつ幅の広い畦畔が認められ、数面の水田を組み合わせた区画があったことが予想される。畦畔の規模は幅の広いもので幅1.3m～4m、狭いもので幅30～70cmである。

耕作土は砂質の暗褐色土で、約10cmの厚さがある。また、5～6層付近にかけては酸化鉄の集積が認められるが、これは2層水田に対応するものであると思われる。

[水路跡]

第1号水路跡は調査区南辺に沿って西から東に流れる水路で、自然の河川を利用したものと考えられる。規模は南岸が調査区外に延びるため明らかでないが、幅2m以上、深さ50cm以

第12図　1号水路跡と杭列

層No	土　色		土　性	備　考
1	褐　色	7.5YR4/3	シルト	
2	灰白色・灰　色	7.5Y8/2・10Y4/2	砂・砂質シルト　互層	現代の遺物を含む。
3	灰白色・灰　色	7.5Y8/2・10Y4/1	いずれも砂礫　互層	
4	灰　色	10YR4/1	砂質シルト・小礫	未分解植物遺体を含む。酸化鉄が集積する。
5	浅黄色・灰　色	7.5Y7/3・10Y5/1	いずれも砂礫　互層	
6	灰　色・灰白色	10Y6/1・7.5Y7/2	いずれも砂　互層	
7	灰色・オリーブ灰色	10Y4/2・10Y6/2	いずれもシルト質砂 互層	

第13図　1号水路跡断面図

上である。壁面の立ち上がりは緩い。流路は堆積土の様子から南側に何度か位置をずらしているのが確認された。

調査区南側では水路跡が北側に張り出した部分があり、その南隣には長軸3m、短軸2mの楕円形の落ち込みが認められ、その西および北壁面には約80本の杭がかなり密に打ち込まれている。杭は丸材、角材、板材があり、地上部分の残存長は10～20cm程度であった。また、水路跡の北岸に沿ってまばらに杭が打ち込まれていた。

2. 出土遺物

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石鏃、石庖丁、石鏃などがある。

弥生土器（第14図1･2）1は甕、2は壺である。1は胴部が直線的に立ち上がり、頸部がくびれて、口縁部が短く外反するものである。胴部及び口縁部端に縄文が施されるもので、頸部無文帯の下には横位列点文が巡らされている。

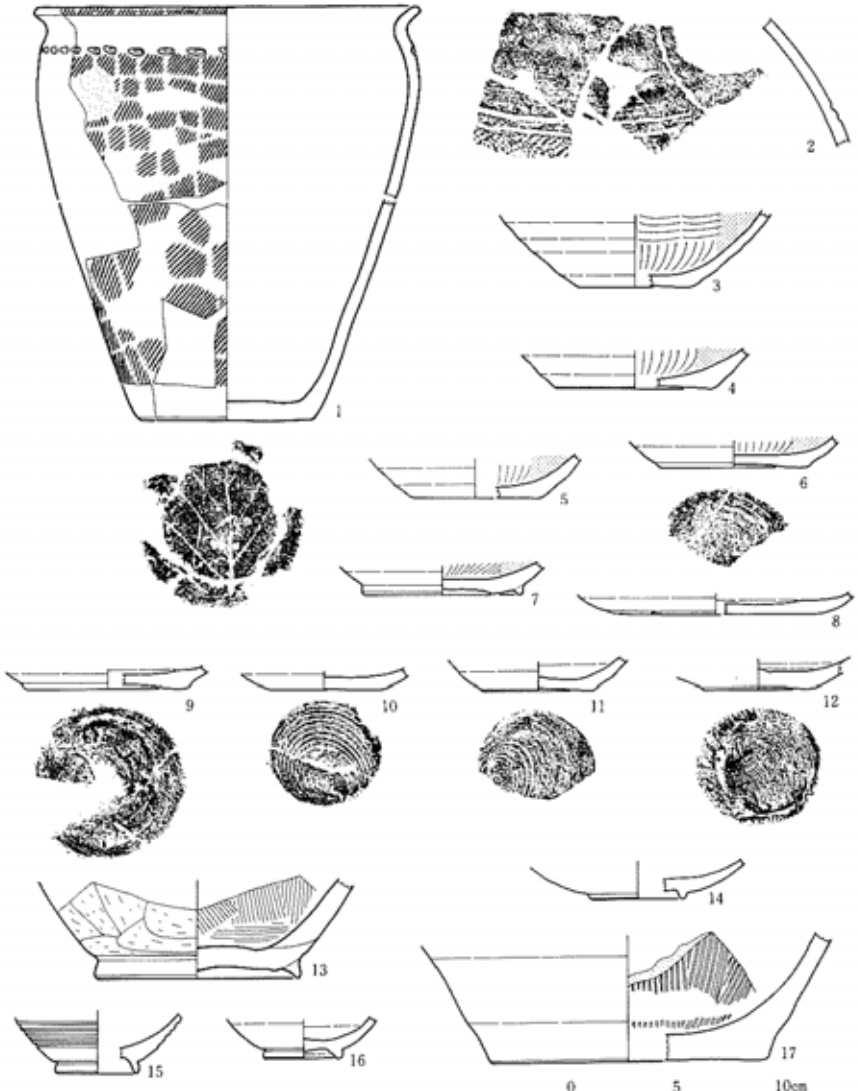
2は胴部破片である。胴部上位に2本の沈線が巡るもので、沈線上位は無文、下位は縄文が施されている。

土師器(第14図3～7)3～6は坏、7は高台付坏の底部破片である。いずれも製作にロクロを使用し、内面はヘラミガキ･黒色処理、底部は回転糸切りである。7は底部切り離し後体部下端に高台が付けられている。

須恵器(第14図8～13)8～12は坏、13は壺の底部破片である。8は底部切り離し後に回転ヘラケズリの再調整が加えられる丸底風のものである。9はヘラ切り、10～12は回転糸切りにより底部が切り離されている。13は外面はヘラケズリ、内面はナデが施されている。染付(第14図14)古伊万里の皿である。内面に草花文と思われる文様が描かれている。陶器(第14図15～17)15･16は碗である。15は相馬焼で、体部から高台脇にかけて平行沈線文があり、外面及び高台内には鉄釉が、内面には灰釉が施されている。16は内面･外面ともに白濁釉がかけられている。17は擂鉢で、製作にロクロが用いられ、底部には回転糸切り痕がある。内面には6本単位の筋目が引かれ、薄い赤紫色の釉がかけられている。瓦(第15図)凸面横ナデ、凹面縦位のナデ、側縁部はケズリが施されている。

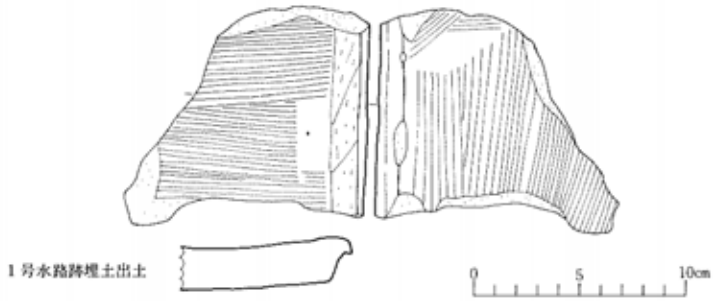
石鏃（第16図）基部から刃部方向にかけて広がり、側面が左右対称をなすもので、縦断面が刃部方向にかけて徐々に薄くなる。刃部は欠損しているため形態は不明である。片方の側面には表裏面から粗い調整剥離が加えられ、整形されているのが認められる。

石包丁(第17図1)欠損品であるため特徴は必ずしも明瞭でないが、背部が直線的な形態のもので、刃部はゆるく外弯し、その刃は両面から幅狭く丹念に研ぎ出した両刃のものである。背部寄りにある円孔は約5mmで、両面から錐状のものによって擂鉢状に穿たれている。表面

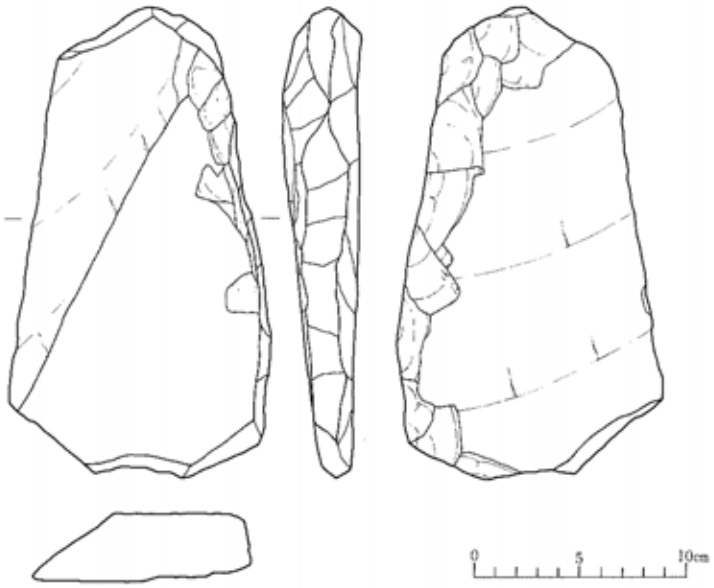


No	出土地点	種別	調整 内面	調整 外面	調整 底部	No	出土地点	種別	調整 内面	調整 外面	調整 底部
1	7・12層	弥生土器甕	口縁部列点文		木葉痕	10	6 層	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
2	9層河川	＊ 壺	横位沈線文			11	5 層 溝	＊ 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
3	6 層	土師器 坏	ミガキ＋黒色処理	ロクロ	回転糸切り	12	6 層	＊ 坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り
4	6 層	＊ 坏	ミガキ＋黒色処理	ロクロ	回転糸切り	13	3 層	＊ 皿	ヘラナデ	ケズリ	付高台
5	6 層	＊ 坏	ミガキ＋黒色処理	ロクロ	回転糸切り	14	3 層	染付 皿	植物文？		
6	6 層	＊ 坏	ミガキ＋黒色処理	ロクロ	回転糸切り	15	3 層	陶器 碗	灰釉	沈線・鉄釉	
7	6 層	＊ 高台付坏	ミガキ＋黒色処理	ロクロ	回転糸切り	16	3 層	＊ 碗	白濁釉	白濁釉	
8	6 層	須恵器 坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ削り	17	1号水路	＊ 擂鉢	筋目6本単位		
9	6 層	＊ 坏	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り						

第14図　出土土器

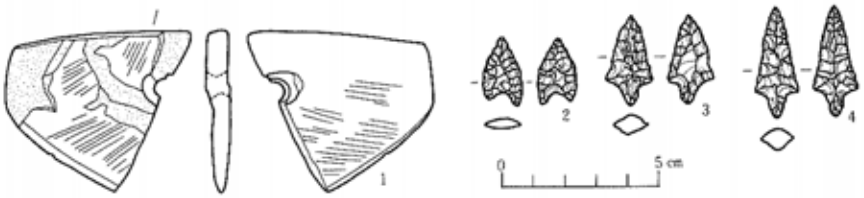


第15図　出 土 瓦



出土地点	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
6　　層	石　鏃	22.2cm	12.1cm	3.5cm	980 g	安山岩

第16図　出土石器 (1)



No	層位	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	No	層位	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
1	12　層	石包丁					粘板岩	3	7　層	石　鏃	2.8cm	1.4cm	0.6cm	15 g	流紋岩
2	19　層	石　鏃	2.1cm	1.1cm	0.3cm	5 g	珪質岩	4	10　層	石　鏃	3.5cm	1.4cm	0.7cm	19 g	珪質頁岩

第17図　出土石器 (2)

は概ね丹念に研磨されているが、研磨前の剥離痕が残存する部分もみられる。

石鏃（第17図2～4）基部形態が凹基のものと凸基のものとがある。1は凹基のもので、側縁は外弯ぎみになるのに対し、2は凸基のもので、側縁は直線的になる。また1は薄手の剥片を素材としているのに対し、2は厚手のものを用いている。

Ⅵ 考　　察

今回の調査では第12層、第10層、第6層、第5層、第3層、第2層の各層から遺構が検出された。ここではそれらの遺構について、時期と性格性について考察を加えていくことにする。

12 層検出遺構

12層検出の畦状遺構に関しては、それに伴う遺物が極めて少なく、時期決定資料が十分ではない。しかし、同遺構の検出層である第12層中から弥生時代中期に属すると思われる甕形土器(第14図1)が出土している(注1)。一方、隣接する昭和58年度調査区でも同一面とみられる層から、やはり中期の土器が出土している（工藤他：前掲）。また、この両調査区とも他に時期の大きく異なる遺物が出土していないことを考えあわせると、大まかにはほぼ同時期に位置付けることができよう。なお、後者の土器の場合は、弥生時代中期の中でも前葉に属するとされていることから、その時期はさらに限定される可能性がある。

この畦状遺構はその広がりから方形状の区画を有すると推定されたもので、それが2区画確認された。これに関連する施設としては、水口状の遺構及び杭列がある。その性格は、全体の形状や広がりが明確でないため不備な点もあるが、上記のような特徴や付近の同一層中から石包丁が出土していることなどから水田跡と考えられる。このことは、先の昭和58年度調査において、同一面とみられる層から水田に関連する水路跡が検出されているなど、これまでの調査成果からもその性格をうかがい知ることができる。

以上のことから畦状遺構については弥生時代中期の水田跡である可能性の強いことが明らかになった。こうしたことをふまえ、本調査区における遺構のあり方について若干の検討をすると、次のことが指摘される。すなわち水田跡は、その範囲が調査区内の北東部に限定されており、他の地区からは検出されていない。調査区の高度をみると、水田のある部分がもっとも低くなっている。またこの水田は層の傾斜が示すように、より低い方向にのびることが明らかなことから、この時期、少なくとも調査区画周辺に関しては、後背湿地のなかでも相対的により低い地域が水田として利用されていたものと考えられる。これを土壌からみても、未分解の植物遺体を多量に含むことから、本水田は地下水位の高い湿田であったことが推定されるもので、立地条件との必然的関係がうかがわれる。本遺跡における水田のより広い地域でのあり方につ

いて、今後の解明を待ちたい。

水田の関連施設である杭列については、畔が途切れたり折れ曲がったりする部分で検出されたもので、このような施設は先の昭和58年度調査区画において類似したものがみられる。そこでは「畦畔の侵食防止」といった指摘がなされているが、横に板材を伴っている点は、本杭列とは異なっている。本調査区の場合は検出状況からそうした性格は想定されず、現在のところは不明と言わざるをえない。

10 層検出遺構

本層の畦状遺構の年代については、決定し得る資料出土していないため不明である。ただし、昭和58年度調査区の本層に対応すると思われる層から、弥生時代中期桝形囲式とされる土器が出土しており、本遺構も同期に位置付けられる可能性が強い。

その性格については、一部に方形状の区画を有する部分があることから水田跡である可能性が考えられたが、遺存状態が悪くかつ部分的検出であるため明らかにすることができなかった。ここではその可能性を指摘するにとどめたい。なお、土壌については、未分解の植物遺体を多量に含むことからかなり湿地性の強いものであり、本遺構が水田跡とすれば湿田であったろうと推測される。

6 層検出遺構

6層水田の時期について、6層中及び6層水田耕作土中から出土した土器と6層上面に堆積した灰白色火山灰の年代から検討を加えることにする。

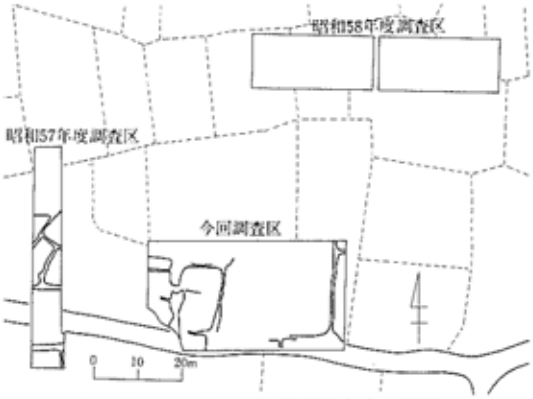
6層から出土した土師器坏は製作にロクロを使用し、内面をヘラミガキ・黒色処理するという特徴をもつもので、表杉ノ入式(氏家1：1958)に位置付けられ、平安時代のものと考えられる。一方,須恵器には底部切り離し後に回転ヘラケズリの再調整を加えた奈良時代のものと回転糸切りによる平安時代のものとがあり、やや年代に幅がみられる。しかも、これらの土器は量的にも少ないうえ、耕作の巻き込みによる攪乱で他時代の遺物の混入も考えられ、さらに水田が連続して耕作された期間を考えると厳密に時期を決定することは難しい。

そこで6層上面に堆積した灰白色火山灰から検討してみる。

今回の調査によって検出された火山灰は、その特徴から調査区に近い山口遺跡、富沢遺跡の各地区や宮城県北部の各地に分布する火山灰と同一のものと考えられる。この火山灰は10世紀前半の年代が与えられている(白鳥：1980)。また、火山灰の検出状況をみると、前述したとおり火山灰は大畦上と調査区北東隅及び東側の耕作土に面的に検出され、耕作土中では5層水田には混入するが6層ではほとんどみられなかった。このことは、6層水田が灰白色火山灰降下後はほとんど耕作されなかったことを意味するもので、灰白色火山灰の降下をもって水田耕作の下限とすることができる。

以上のように、水田の継続期間は下限について10世紀前半と捉えることができたが、上限については不明な点も多い。出土遺物からすれば上限は奈良時代までに遡る可能性も考えられる。

次に6層水田の性格について検討してみる。



第18図　泉崎前地区遺構配図（1）6層面

6層水田の特徴は畔畦が大畦と小畦から形成され、大畦によって基幹的な区画がなされた中を小畦で細分しているという点と、それらがほぼ真北を基準とした区画であるということの2点があげられる。このような特徴をもつ水田は富沢遺跡内では、泉崎前地区（吉岡：前掲）からは真北を基準とした東西方向の畦畔を、地形に沿って斜めにのびる南北畦畔とそれに直交する小畦によって区画された水田が、中谷地地区(注2)からは東西にのびる比較的幅の広い畦畔を南北の小畦で区画した水田が、また本遺跡に近接する山口遺跡でも条里遺構とされる真北を基準とした大畦を、等高線に平行する東西の小畦によって区画された水田が（田中：前掲）認められており、さらに泉崎浦地区、鳥居原地区（吉岡：前掲、斎野裕彦：1983）からも真北を基準としたとされる水田が検出されている。

このように、富沢遺跡周辺では灰白色火山灰降下直前の水田は真北を基準とし大畦による基幹約な区画を、地形にあわせて区画した部分を除き、方位に沿った小畦によって細分するという計画的な広範囲にわたって行われたと考えられる。

最後に水田の耕作状況について考察を加えると、6層水田は耕作土が未分解の植物遺体を多く含む黒褐色のシルトで、耕作土下に酸化鉄の集積を伴わないという特徴をもつことから湿田であったと考えられる。

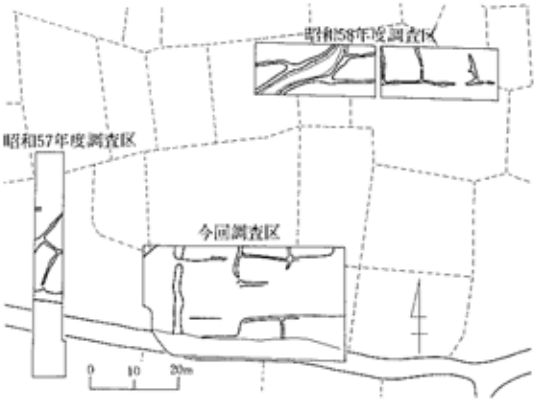
5層検出遺構

5層水田の時期は、水田耕作土及び層中からの出土遺物が表杉ノ入式の土師器坏と須恵器坏の小片が若干あるのみで遺物からは明確に決定できない。

しかし、5層水田が灰白色火山灰降下後に成立していることと、出土する遺物が平安時代の土器のみでそれ以降の遺物がみられないということからその幅は限られ、その時期は平安時代の後半と考えられる。

次に、6層で確認された水田の区画が灰白色火山灰降下後にどのような変遷をするのか考察してみる。

5層水田の特徴は、水田区画の畦畔の位置が基本的には真北方向を基準して、しかも南北の大畦のように基幹的な畦畔が同位置に構築されるという前段階の水田の伝統を受け継いでいる面がみられるのと同時にいくつかの小畦畔は前段階と異なる位置に構築されたものもみられるという点である。



第19図　泉崎前地区遺構配図(2)5層面

これを富沢遺跡内の他の地点や近接する遺跡の本地区5層と対応する灰白色火山灰降下直後の水田を比べてみると、昭和58年調査区や中谷調査区（注2）では灰白色火山灰降下直後の畦畔が降下前の畦畔とすべて同じ位置で確認されており、降下前の条里区画がそのまま継続されている。

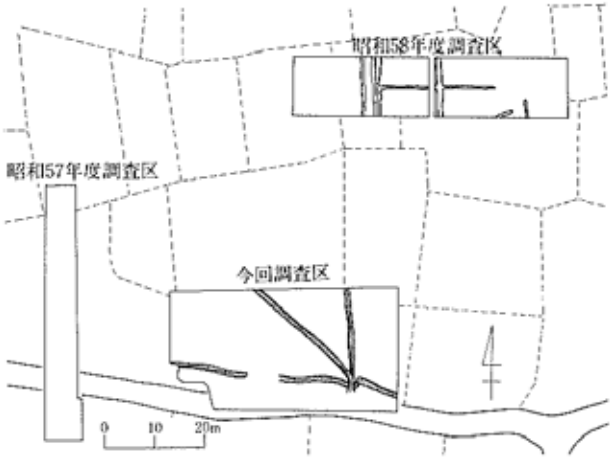
一方、山口遺跡では灰白色火山灰の堆積の様子から火山灰降下後は畑地として利用され、再び水田として利用されるのは中世以降であると言われている。

このように、限られた範囲内においても灰白色火山灰の降下を前後して前段階の区画をそのまま継続する例(中谷地・泉崎前地区)、一部手直しする例(本調査区)、非水田域になる例（山口遺跡）など様々な様相を示し、水田区画が時代とともに変遷していったことがうかがわれる。

次に水田の耕作状況について考察を加える。5層水田の耕作土は暗灰黄色のシルトで未分解の植物遺体をあまり含まない。また、水田に伴う潅漑用水路②③や水田③⑥の導水用の水口の存在が示すように、乾田的な要素をもつが、耕作土下に酸化鉄の集積がみられないことから典型的な乾田とは考えられず、湿田との中間的タイプ(半乾田)であったと考えられる。

3層検出遺構

本調査区では水路跡のみ検出しているが、隣接する昭和58年度調査区では本層と対応する水田跡と溝跡を検出しており（工藤他：前掲）併せて考察したい。



第20図　泉崎前地区遺構配図(3)3層面

いずれも水路跡にも出土遺物はな

く、本調査区3層中より近世の陶磁器が出土しているのみで時期決定資料に乏しいが、近世の遺構と考えられる。

4号水路を除く3条の水路跡については、その方向が昭和58年度調査区の3層水田に伴う水路と一致している。とりわけ3号水路跡については、昭和58年度調査時の1号溝の延長上にある。

以上のことから区画に沿う3条の水路跡は周辺の揚排水路の役割を担っていたことが考えられるほか、本調査区では畦畔等は確認されなかったが、水路に伴って水田が存在していた可能性も指摘できる。4号水路跡については、他の水路の方向とはことなっていることから、これらとの時期差も考えられるが、層位的に識別することはできなかった。

2 層検出遺構

2層検出遺構の時期については、2層中から近世以降の陶磁器、1号水路跡の堆積土中から擂鉢・瓦が出土しているのみで判断材料に乏しいが、近世以降のものと考えられる。

調査区西寄りにある幅の広い南北畦畔は間に耕作されなかった時期があるにもかかわらず、前段階から受け継がれているが、水路の状況はその有り方が3層と大きく異なり、灌漑施設の変更があったことがうかがわれる。2層ではさらに1区画だけではあるがその規模を知ることができる。すなわち、幅の広い畦で囲まれた③・④・⑤からなる部分の面積は10間×15間＝150歩(5畝)と切りのよい数字で示され、その区画ではさらに幅の狭い畦で面積25～40歩の水田に細分しており、かなり計画的な区割りがなされていたと考えられるが、この層で検出される水田跡がすべて同様の計画性をもって区画されたかどうかについては不明である。

また水田の状況は、耕作土が砂質の土壌で未分解植物遺体がほとんど含まれないこと、さらに下層(5～6層付近)に酸化鉄が集積していることから、5層水田までは完全に乾田化されていなかったこの地区でも、今日のように乾田となっていたことがうかがわれる。

水路跡については、検出された水田にどのような形で利用されたかについては不明であり、堰跡についても水田の揚排水に関連する遺構と考えられるが、具体的な役割は明確でなく。

注1　この種の土器は角田市鱸沼遺跡（志間泰治：1971）や仙台市南小泉遺跡(伊東：1950、伊藤玄三：1966)などに出土例があり、それぞれ弥生時代中期大泉式、〃桝形図式に位置付けられている。

注2　「富沢遺跡第30次調査現地説明会資料：1987．9」による。

注3　東北歴史資料館　藤沼邦彦氏の御教示による。

Ⅶ　まとめ

1. 本遺跡は名取川の支流である笊川左岸に広がる後背湿地に立地している。
2. 調査の結果、弥生時代と平安時代の水田跡及び近世の水田跡と水路跡が検出された。このうち弥生時代と平安時代の水田跡については、それぞれ2時期に分かれ、近世の水田跡と水路についても時期差がみられる。
3. 弥生時代の水田跡のうち下層のものについては、弥生時代中期に位置付けられるもので調査区の低いところで部分的に検出された湿田である。上層のものについては明瞭ではないが、水田跡と推定され、時期は前者よりやや降るものの、中期にすると考えられた。
4. 平安時代の水田跡は、10世紀前半に降灰したとされる灰白色火山灰を境に新旧に分かれるもので、いずれも大畦と小畦により、ほぼ真北を基準とした区割りがなされている。水田形態は土壌の観察から、下層のものは湿田、上層のものは湿田と乾田の中間タイプと判断された。
5. 近世の水田跡は用水路の整備による大きな変化がみられるが、一方では区画の方向及び大畦の再利用など、以前の時代との根強い関連性もうかがうことができる。水路跡については一部のものについて水田の関連施設である可能性が指摘された。

（引用・参考文献）

伊藤　玄三（1966）：「弥生時代の発展と地域性－6東北」『日本の考古学Ⅲ　弥生時代』

伊東　信雄（1950）：「仙台市内の古代遺跡」『仙台史Ⅲ』

伊東　信雄（1957）：「古代史」『宮城県史1』

氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』

工藤哲司他（1984）：「富沢水田遺跡」『仙台市文化財調査報告書第67集』

工藤哲司他（1986）：「柳生」『仙台市文化財調査報告書95集』

斎藤　裕彦（1983）：「鳥居原遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査概要Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書第56集』

佐藤　洋（1985）：「仙台市城三ノ丸」『仙台市文化時調査報告書76集』

佐藤　洋（1987）：「六反田遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書102集』

志間　泰治（1971）：『鱸沼遺跡』

白鳥　良一（1980）：「多賀城出土土器の変遷」『宮城県多賀城調査研究所研究紀要Ⅶ』

滝田　項一（1981）：「福島県のやきもの」『日本やきもの集成1　北海道・東北・関東』

田中則和他（1981）：「六反田遺跡」『仙台市文化財調査報告書第34集』

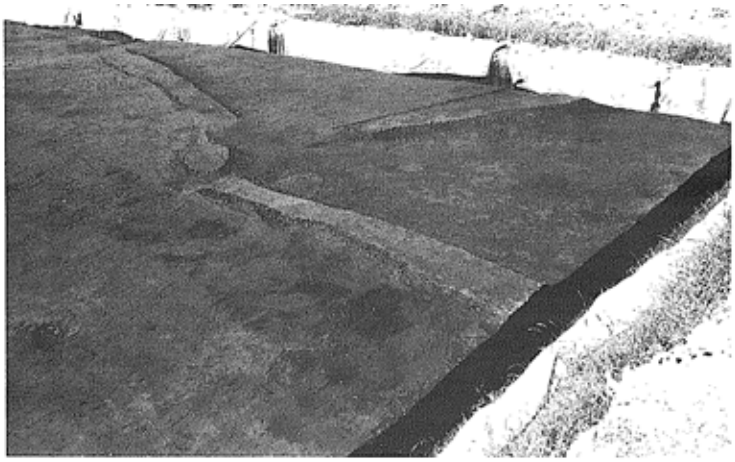
田中　則和（1984）：「山口遺跡Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書第61集』

八賀　晋（1971）：「古代の農耕と土壌」『古代の日本2　風土と生活』

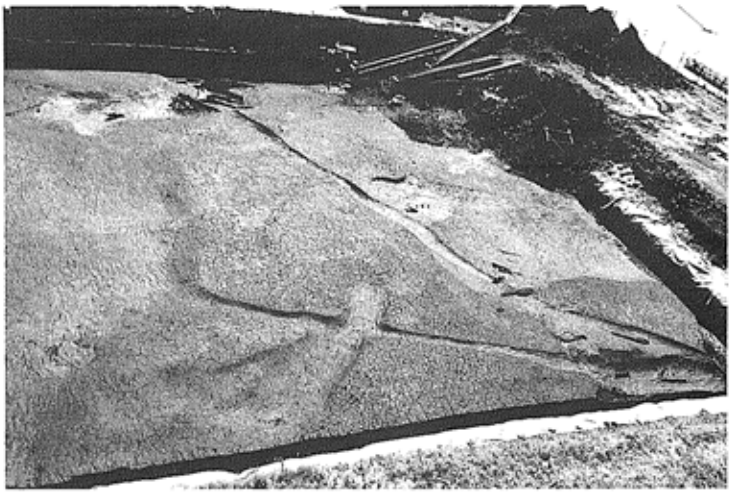
吉岡　恭平（1983）：「泉崎前遺跡・泉崎浦遺跡－仙台高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書第56集』

写　真　図　版

第12層水田跡

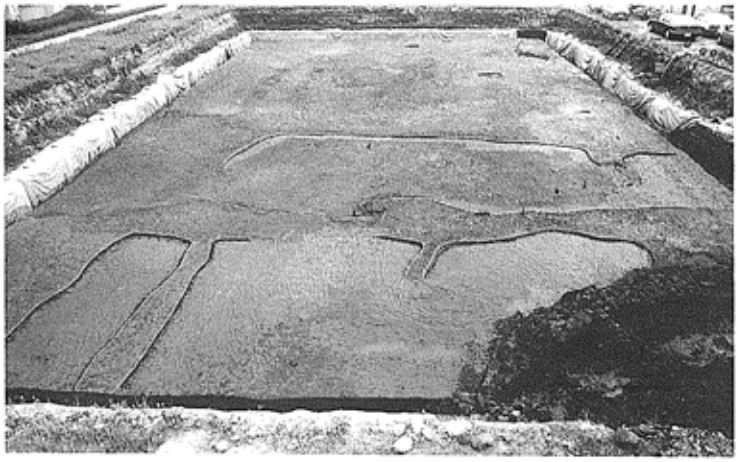


第12層河川跡

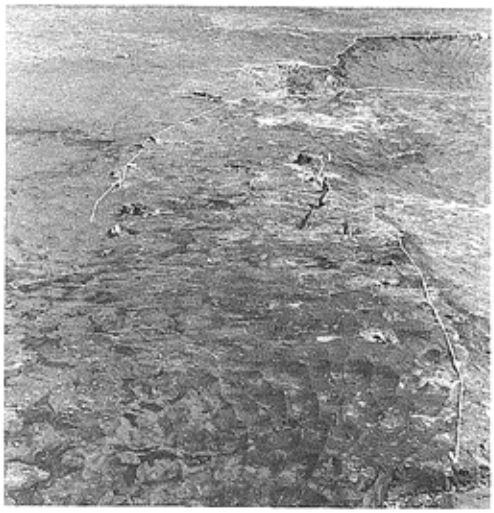


第10層水田跡

図版1



第6層水田跡(西より)

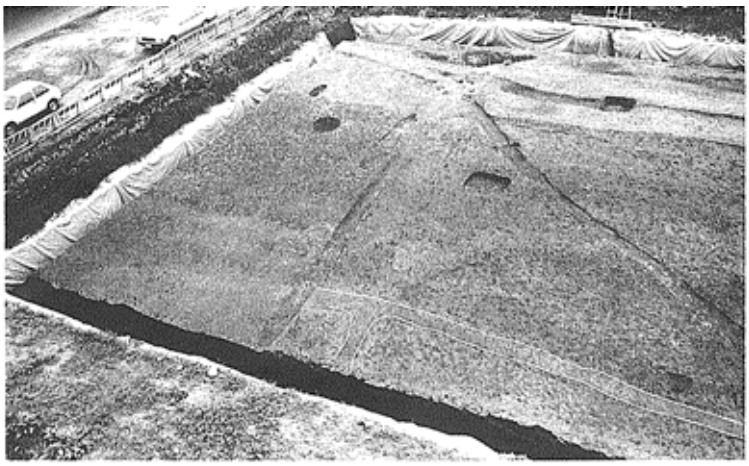


第6層水田大畦と杭列(南より)

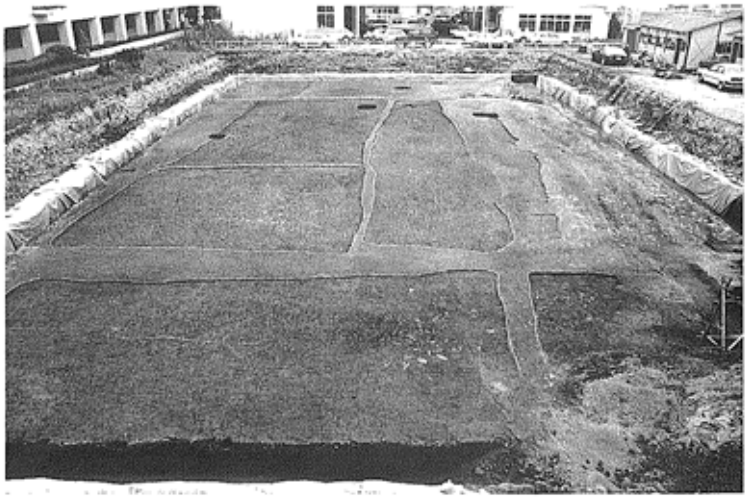
第5層水田跡(西より)

図版2

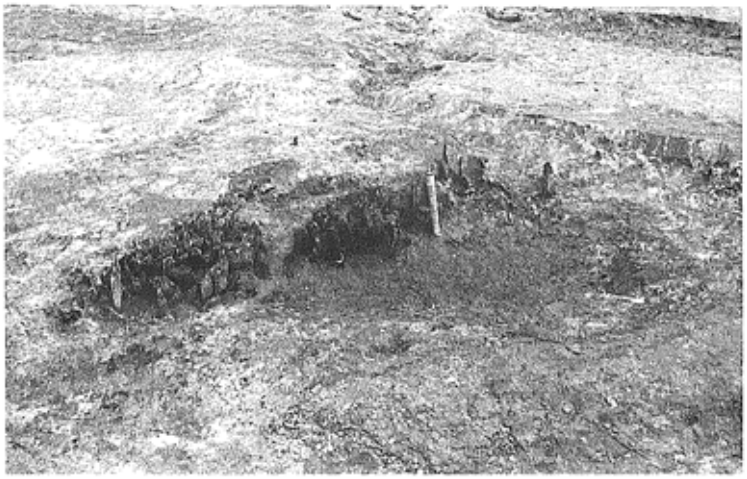
第３層水路跡（北より、
手前は５層水田の畦畔）



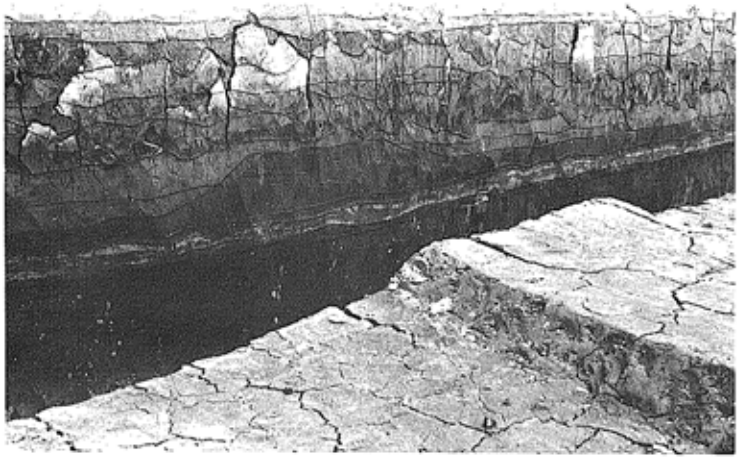
第２層水田跡（西より）



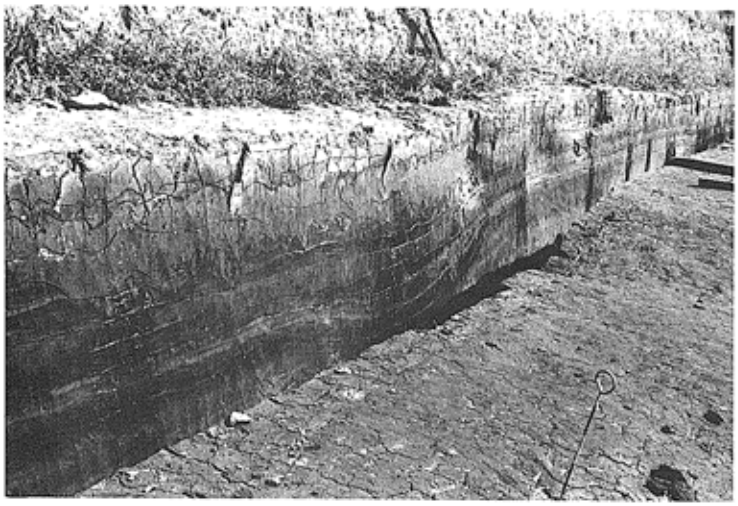
堰　　跡



図版３



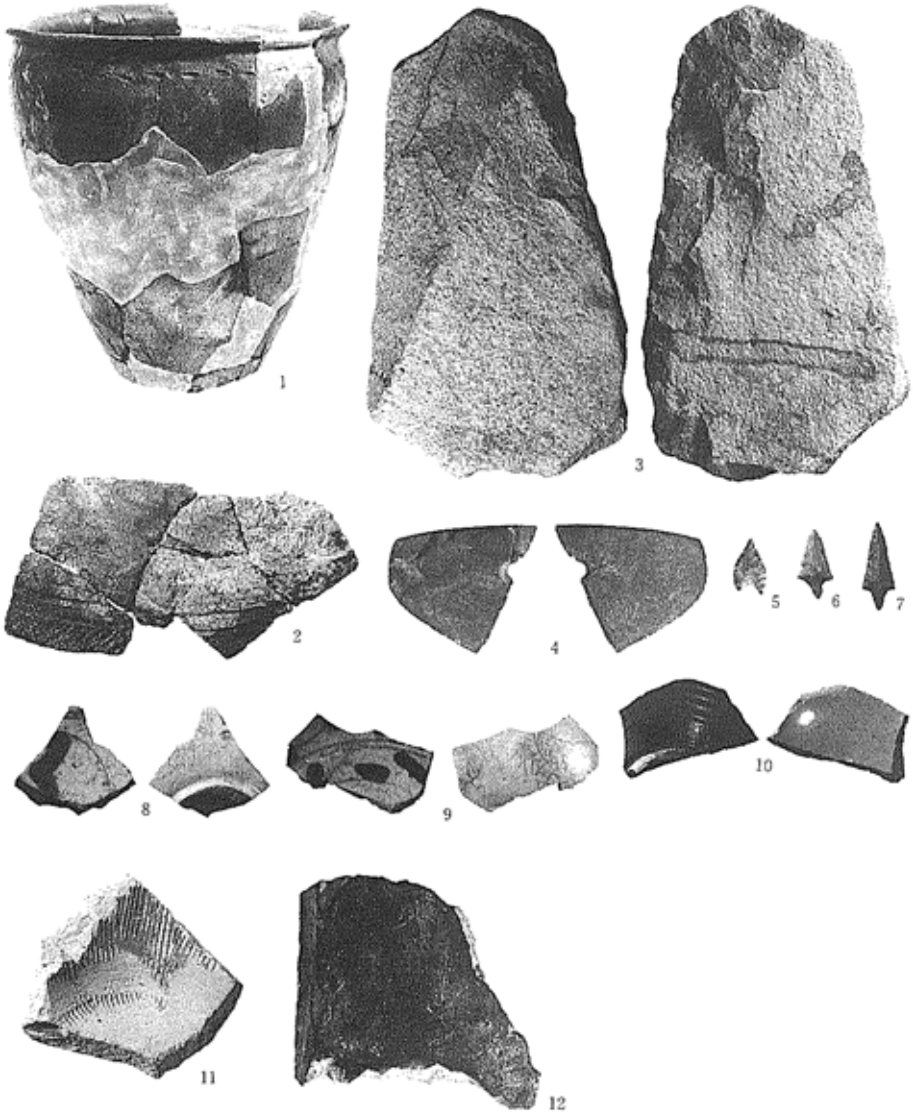
土層断面（東壁・手前は第12層水田の畦畔）



土層断面（北壁）

深掘りトレンチ①

図版4



1．第14図1　　5．第17図2　　9．第14図14
2．第14図2　　6．第17図3　　10．第14図15
3．第16図　　7．第17図4　　11．第14図17
4．第17図1　　8．第14図14　　12．第15図

図版5　出土遺物